2025年4月30日•5月1日　水曜祈り会•金曜集会　　吉田真司

本日の学び　　テーマ:「それはキリストの福音?」　テキスト:ガラテヤ1章1-12節

【理解の手がかりとして】

■　『ガラテヤの信徒への手紙』について

パウロが小アジア（現在のトルコ）のほぼ中央部に位置するガラテヤ地方に最初に足を運んだのは第二回伝道旅行の時。パウロがそこに教会を設立したという記述は聖書にはないが、おそらくパウロはその伝道旅行の折に、ガラテヤ地方にてある程度の信徒を得たのだろうと思われる。そして彼は第三回伝道旅行の時にも、この地方を巡回して信徒たちを力づけたことが使徒言行録の記録からも分かる（使徒 18:23）。この手紙の受け取り手は、一つの教会ではなくて、この地方の諸教会。この手紙には、その地域の諸教会が直面した厳しい問題があったことが記されている。そしてその問題の解決のため、パウロはこの手紙を送った。

この手紙は、『ローマの信徒への手紙』（全 16 章）、『コリントの信徒への手紙一』（全 16 章）、『コリントの信徒への手紙二』（全 13 章）と並べてパウロの四大書簡の一つと言われている。先の三つの手紙はそれぞれに分量大きいものだがこの手紙は全 6 章で分量的にはむしろ小さな手紙。それにも拘らず、この手紙がパウロ四大書簡に入れられるのは、その内容と意義によっており、「キリスト者の自由の大憲章」とも言われる。それほど、新約聖書の中で占める位置と意味は非常に大きいと言われている。

■　本文解説

「人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ」（1:1）・・・ここに、手紙の送り手であるパウロの自己紹介がある。ここに「福音に仕える者」が何に依って働くことが出来るのか、その依り頼むべきお方は誰か、ということが鮮明に表現されている。

キリスト教の偉大な伝道者であり使徒であったパウロ。キリスト教がユダヤの一地方宗教から世界的な宗教へと発展していったのにはパウロの功績は間違いないところ。彼の働きによって、各地に信仰者が起こり、キリストの教会が出来ていった。キリスト教史上、パウロほどの人はいなかった、彼ほどの偉大な使徒はいなかった、とも言える。

しかし当時、パウロには二つの負い目とでも言うべきものがあった。一つは、彼はイエスから直接選ばれた「直弟子」ではなかったこと。もう一つは、彼はかつてキリストの迫害者であり、多くのキリスト者を苦しめた指揮官だった、ということ。これら二つの理由のために、当時は冷ややかにパウロを眺める人、あるいは露骨にパウロを中傷し攻撃する人たちがいた。パウロはそのような現実の中で、それへの応答の言葉として、この冒頭の挨拶（自己紹介）を語った。彼は「人からではなく」という。パウロは、自分が今、伝道者として、使徒として立っているのは、人々の力、人々の支持といったものに依らず、ただただ「神の力」によってある、このことを告げたかったのであった。

パウロは、「使徒」としてこの手紙を書く。それはひとえに「わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように」（1:3）との願いからである。この一節はパウロ書簡群に広く見られる定型文（ローマ 1:7、1 コリント 1:3 他多数）であるが、単なるお決まりの挨拶言葉ではなく、キリストの「福音」に固く結び合わせられる中でいただく「恵みと平和」が大切であることを伝えようとしている。４節では、その「恵みと平和」の出処が、神の計画のもとにキリスト

が十字架に死に、罪を贖い、救いを成し遂げてくださったことにあるのだ、と言っている。ちなみに、パウロ書簡群における特徴として、挨拶部にありがちな「受信者への感謝」（例：1コリント1:4）はここにはない。最初の方で「この手紙には、その地域の諸教会が直面した厳しい問題があった」と述べたが、いきなり本題に切り込む緊急性（感謝を述べている場合ではない心配な状況）があったからであろう。それは「主イエス・キリストの恵みと平和」を奪い取ってしまう緊急事態であった。

パウロはこの時、「あきれ果てて」（1:6）いた。それは「福音」から「こんなにも早く離れ」（同）ようとしていること、そして「ほかの福音に乗り換えようとしていること」（同）に対してである。※「ほかの福音」とはあくまで皮肉であって、「ほかの福音」は無い。あるのは「キリストの福音」のみ。

パウロは二度にわたって「呪われるがよい」（1:8，9）と言う。大変穏やかではない言葉。しかしそう言わずにおれないほど、「キリストの福音」の歪曲がもたらす重大な結果を心配しないではいられないパウロであった。パウロが対峙する、キリストの福音を歪めようとする勢力とは何だったのか。それは「ユダヤ主義者たち」であった。彼らはパウロの説く「キリストの福音」（信仰によって救われる）に対して、救いには「信仰のみ」でなく、「律法の遵守」（具体的には、ユダヤ人のように「割礼」を受ける）も必要だと説くことによって、律法に忠実に生きてきたユダヤ人の優位を誇ろうとしたのであった。

段落またいで11節で、再び1節と同様の表現があらわれる。「人によるものではありません」（1:11）である。そして 12 節にある「イエス・キリストの啓示によって」（1:12）をより引き立たせている。パウロはただひたすらに「イエス・キリスト」を指し示し、そのお方によって、そのお方の十字架と復活によって私たちの罪が贖われ救われること、その「キリストの福音」を愚直に告げ知らせたのである。

【聖書教育より】

「パウロが分かち合おうとした『キリストの福音』とは、どのようなものでしょうか」（大人クラス）